

ているのではないでしょうか。

以上、簡単にコメントルームの日常をご紹介しますが、個性豊かな先生方の中ではなかなかユニークな出来事もたくさん起こります。毎日のルーティーンの仕事以外にも臨機応変な対応を求められることもあり、勉強の日々です。このような素晴らしい環境、そして様々な分野でご活躍されている先生方の研究を間近に感じることができ、たいへん光栄です。ですから私たちも感謝の気持ちをもって、穏やかで暖かみのある雰囲気作りを心がけ、日々務めるようにしております。そして皆様をお迎えする時には、全ての思いを込めてご挨拶したいと思っています。「おはようございます」、「こんにちは」。

木曜セミナーから学ぶ

堀 まどか

二〇〇三年春以来、総研大の院生、そして機関研究員として、「木曜セミナー」を拝聴してきた立場だった私は、今回

初めてそこへ自ら登壇する機会を得た。今回学んだ点を簡単に記しておきたい。

第一九五回木曜セミナー「二〇世紀初頭の俳句・能の海外発信——『二重国籍』詩人・野口米次郎のもたらしたもの」

コメンテーター…三原芳秋同志社大学准教授

開催日…二〇一三年二月二一日

場所…日文研セミナー室1

(一一一) コメンテーター(外部の研究者)とのセッション

当初は自分の報告だけを依頼されたが、この機を生かしてかねてから敬意を抱いていた研究者(三原芳秋氏)にコメンテーターとして来てもらうように交渉してみた。日本文学研究から比較文学研究に研究途中で移項した私は、理論面や議論技術が極めて弱いことを自覚している。氏は英米モダニズム文学およびポストコロニアルの批評理論が専門で、かつ私がかれから足を踏み入れようとしている植民地朝鮮の事象にも詳しいので、理論や東アジアでの理解の問題という自分に欠けている点を指摘してもらって、これからの課題を明確化したいと考えた。日文研の先生方からはこれまで多大な御教

示を受けてきたが、ここでは通常とは異なる「遭遇」をみてもらい、御指導を得て、今後の研究の「可能性」を可視化したかった。何はともあれ、外部との出会いは刺激的であり、攪乱が期待できるので面白いだろうと思った。

(二一) 広報の方法

研究協力課の方と連携をとって、面識のある新聞記者の方や出版社の方などとも連絡を取り、外部の若い研究者が来てくれるような工夫を考えた。そのためかどうかは定かではないが、若手の研究者にすぎない私の報告にもかかわらず、参加人数が通常より少し多かったように思われる。やはり、外部の方が、特に若い研究者や院生たちが、木セミに関心を持っていてることを感じた。国内／国外の研究者の交流や異分野の領域横断的交流に加えて、外部の若い研究者が参加してくれることは、私たち研究員や院生にとって大きな励みになる。また特に思いがけなかったのは、長年お目に掛かってみたかったサンディップ・K・タゴール氏（R・タゴールの遺族）がどこからかセミナー情報を聞きつけて来所してくれたことである。

(二二) セミナーの冒頭で

まず最初に、司会者から発表者の紹介をさせていただけたことが非常に良かった。外国人研究員やフェローの人などに、私のような研究員や外部から来たコメンテーターの情報、経歴だけでなく研究内容まで簡単に紹介してもらえたことは有効である。（出入りの激しい日文研では、お互いの顔を見知っていても、専門やその背景を知るタイミングを逸していることが多々あるからである。）外部からの聴衆もあったので、冒頭紹介がなされたことで内部向けに閉じられた雰囲気が無くなり、海外のセミナーのような緊張感があった。

(二三) 発表方法

今回の私の発表では、①「二重国籍者」とはなにか、②それが戦争への傾斜という時局の中でどのような表現の政治性に流れていくのかを主題とした。これは日文研に集う誰もが関心を共有する普遍的なテーマであると考えたからである。理論的に未熟であることは自覚していたが、それを様々な角度から指摘してもらうことが今後の自分には勉強になると思い、あえてこの部分で議論の場を設定した。とくに注意したのは、フロアとの議論を最優先して、一方的な話にならない

よう三〇分の時間を残したことである。

(二一三) 議論

私のプレゼンでは、「二重国籍」詩人と呼ばれた野口が、言語化できないものをいかに日本及び西洋の読者に表現しようとしたのかという「表象の過程」を問題にしていた。だが、うまく伝わらなかったところがあつたのかもしれない。最初の外国人研究者からの質問では、「真」の日本は何かという本質論になつてしまった。私の期待と異なる方向に流れていく状況を救つてくださるかのように、その後、国民国家は植民地や帝国が夢想する幻想ではないかという指摘（磯前順一准教授）、「二重国籍」といういわば空洞の概念に野口はどう「戯れ」ているのか、その変化の過程を検証する必要があるという指摘（鈴木貞美教授）がなされた。また、「西洋／東洋」、「二重国籍者」、「境界」といった主体形成を批判するべきではないのか、といった理論面の指摘（三原氏）も大変重要で鋭く新鮮だった。それぞれ何が問われているかを理解しながらも、その場では的確な返答や見解を示すだけの余裕も能力もなかった。（私は、長年親しんできた先生方についても、これまで十分に理解していなかったのではないかと気

づかされて、ハッとしていた。）

(二一四) 課題

結局、貴重なコメントを多数受けながらも、個々の発言を点のままに残してしまい、線として展開させられなかった。もっと個々の発言の問題点を自分なりに再解釈し、整理しつつ、議論をつなげるべきだったのだが。また、コメントイターと前々日に打ち合わせしていた話題も議論を通して展開しようとしていた方向性も、私の経験不足のせいで全く生かすことが出来なかった。忸怩たる思いが残っている。しかし、この思いは大切にして今後に繋げたいと思う。（※）

(三) 最後に

この「木曜セミナー」では、専門知識を共有するメンバーで行う共同研究会とは異なる、より開かれた知の空間——実験的に研究の現場を披露し、研究の躍動と展開を醸造する場——が作り出せることを体感した。つまり、各共同研究の報告やプロジェクトの成果や、専任・客員・研究員の最近の関心事に触れる自由な空間であり、外部からの思わぬ攪乱をも積極的に楽しみながら、日本研究の方向を模索することがで

きる挑戦的な舞台なのだ。国内と国外、諸分野の交流を目的とする日文研にとって、この木曜セミナーが、その学問的交流の場としての「心臓部」をなしているのかもしれない、とも感じた。

(※補記) 個人的な観点からいえば、翌々日に韓国に赴任する予定であった私にとっては、今回の木セミは、自分自身の限界と課題を強烈に体につける場であり、愛する恩師たちから公式に「送る言葉」をいただく場であった。セミナー後にも、数々の激励の言葉や温かい送別の辞をいただいた。生涯忘れ得ぬ舞台空間を与えていただいた幸運に、ここから感謝している。

(嶺南大学校講師)

元国際日本文化研究センター機関研究員)

アーカイヴということ

森 洋久

現代アートのアーカイヴを通じて、アーカイヴの本質に迫ったシンポジウム「アート・アーカイヴⅢ」今、あらためてアーカイヴを問う」(二〇一三年三月二三日)に参加した。吉原治良が中心となって始まった「具体美術協会」は二〇〇四年に兵庫県立美術館で大規模な回顧展を開いている。あるときは前衛的、あるときは伝統的に、様々なジャンルを縦横無尽に超え、美術館という既成の枠の中に収まりようも無いこの運動を、だが、納めてみようとすることの意味への問いというのが考えさせられるところである。美術館や博物館といった伝統的なアーカイヴ機能の存在に現代アート自身が挑発的に対向してくる時代があったが、現在となると、意識的な対決も消え、ゆらりゆらりとしている。流通し消費される「アート」、エフェメラな「アート」、あるいは、既にデジタル化、アーカイヴ化されたかのような「アート」、アーキヴィストにとっては手強い相手がどんどん生まれている。何を何のためにアーカイヴするのか、会議が白熱した。